

■BF女王マルティナ@ハンデマッチ即墮ち

とある町の地下、人知れず栄える闘技場。そこでは非合法の闘技……男女が互いに性感を与え合い、相手の精力を尽きさせることをKO扱いとする『バトルファック』が行われていた。

男女共に切磋琢磨し、激戦を繰り広げる中……一人の女淫闘士が、明らかに他とは一線を画す実力を持っていた。

『女王、組み敷かれた！ このまま挑戦者が決めるのか——?!』

バニースーツに身を包む、豊満さと引き締まったメリハリを併せ持つ絶世の美女・マルティナ。彼女こそ、他を圧倒する実力で女王と讃えられる闘技場最強の淫闘士だ。

彼女は現在、淫闘リング上において挑戦者の少年に組み敷かれ、犯されて激しいピストンを喰らっている。一見して不利な状況に、実況がピンチを煽るが——

「……坊や、それで全力なの？ 弱っちいオチンポね♥」

平然とした顔で言い放つと、臈肉がキュウッと引き締まる。更に肉幹に絡み付き、扱き上げるような動きをしてみせた。

締めが強さ、収斂の緩急。完全に男のツボを心得た動きが、まだまだ精力に余裕のあったはずの少年を一気に追い詰める。

「ほおら……オマンコの中でイッちやいなさい♥」

ゴブツ♥♥ ゴビュルルルルツ♥♥

【ああっ！ うあああっ！】

反撃開始から僅か数秒。情けない喘ぎと共に、少年が果てさせられる。マルティナの淫気により通常以上に盛った肉根は限界を超えた射精を放ち、結合部から逆流する量と勢いを見せている。痛々しいまでの射精に悶絶する少年。対し、マルティナは強い射精すら愉しんで、ゆっくりと立ち上がる。

「ふふ……中々いい中出しだったわよ♥ あと十倍くらい精力があれば、勝負になったかもしれないわね♥」

相手を褒め称えるマルティナ。無論、少年からすればこの上ない皮肉と屈辱である。いかにも絶倫であることを誇っていた巨根を弱々しく萎びれさせ、悔しさに涙し、それでも恍惚とする少年。彼を一瞥したマルティナが実況によって讃えられ、改めて女王の実力を地下闘技場に知らしめる。

『圧倒——！ あの状況でも余裕のマルティナ！ 彼女を倒せる男はいないのか——?!』

あまりに強すぎるがゆえに、ファンとアンチのどちらからも敗北を期待されるマルティナ。本人も更なる強敵を待ち望んでいるのだが……残念ながら、そうそう都合よく現れてはくれない。

(そういえば、ハンデの話が来てたわね……今度やってみようかしら。……あら?)

以前ハンデの提案をされていたことを思い出すが、思考が外部からの刺激で止められる。失神した対戦相手の少年。彼と同じチームの少年たちが、ルールを無視してリングに乗り込んできたのだ。

【よくもウチのエースを！】

「あらあら、乱入戦？」

『あついでません！ それは反則——』

男のプライドを傷つけられて我慢ならなかったのか……挑戦者の仲間が三人がかりで挑んできた。もちろん、対戦カードが組まれていない選手の、しかも複数での乱入は反則行為だ。

どれも名のある絶倫選手たちだが、三人がかりならば勝てると思ったのか、そうでもしなければと思ったのか……股間を怒張らせて怒りの相で襲いかかる。しかし……

「——少しだけ、本気になっていいかしら♥♥」

マルティナが魔力を淫気に変換させ、強く漲らせる。すると桃色のオーラが身を包み、尋常ではないフェロモンが放出される。

リング上に広がる淫気フェロモンに触れた瞬間、少年たちの身体が一瞬硬直。強すぎる淫気に気を取られ、マルティナに見惚れてしまったのだ。

魅了術を振り払おうとした時にはもう遅く——マルティナは元一流闘士ならではの眼にも留まらぬ速度で動き、一人を右手、一人を左手、最後の一人には左足を使い、肉根を扱く。超高速、かつ巧みな指使いの扱きは、少年たちが反応するよりも早く肉体に強い性感を与え——

ドビュルルルルッ♥♥ ビュグッ♥♥ ビュビュ——ッ♥♥

【おああっ！！】【は、速、あ……！！】【イグうううっ！！】

三人がほぼ同時に絶頂。輪姦どころか手を触れることさえ出来ず、マルティナによって瞬殺されてしまう。

「はい、おしまい♥」

『——っとこれは?! マルティナ、超高速で移動と手コキを行い……なんと三人同時にイカせたあ——！！』

相当なハンデがなければお目にかかることはない、淫闘での三人抜き。しかも不意打ちを迎え撃つての同時瞬殺という神業に、会場の客が一気に沸き上がった。

自他が敗北を期待してなお、圧倒的な淫技で魅了する。自分の魅力に惚れ惚れしながら、無敗の女王はリングを去っていく——



【本日も見事な淫闘でした】

「ふふ、ありがとう♥」

試合後のケアを終え、スタッフと次の対戦について話し込むマルティナ。連戦連勝の彼女はまさに地下闘技場

の目玉であり、スタッフ側も喜ばしいとのことだが……

問題点の一つ。一部の客やスポンサーから、強過ぎて勝負にならないとクレームが来ているのだ。

【というわけで、媚薬などを使ったハンデ戦】

「私もそろそろ、そういったことをしたくなっていたのよ」

試合直後に考えていたハンデ戦の話がくる。マルティナとしても、正直現在のパワーバランスは面白くない。勝つこと自体は嬉しいが、簡単に勝てるために淫闘の愉しみが薄れてきているのだ。

意見が合致し、実施するハンデの相談に入る。とりあえず初期案のものを適当に選び、媚薬と貞操帯を使った性欲管理に決定される。

「貞操帯って、どんなものなの？」

【こちらになります】

「あら♥」

魔力により、自慰と性交のみを制限するボンテージ風のショーツ型が渡される。専用の鍵が用意されており、いくらマルティナといえど力尽くでは外せない仕組みだ。

【では今日から……試合は一週間ごと、試合日以外は媚薬漬けと自慰禁止の性欲管理生活を行っていただきます】

「ええ。チェックの方、よろしくね♪」

(……この程度のハンデで、愉しめるようになればいいんだけど……)

スタッフ側もあまり活用したことの無いハンデ制度。弱過ぎず強過ぎない程度のものにしたつもりではあるが……マルティナは貞操帯も媚薬も経験済みだ。過去より使用期間は長く、特に媚薬は強力なものにしているが、果たしてそれで自分が弱体化できるのか。一抹の不安を抱えたまま、禁欲生活が始まる……



……禁欲生活、一日目。

(あ……オナニーしちゃいけないんだったわね。それどころか触れないのよね……いつぶりがしら、こんなのって)

試合がない日は、もっぱらセックスかオナニーに励んでいたマルティナ。しかし今はどちらも禁止されていることを、股間に伸ばした指が貞操帯に阻まれることで気付かされる。

思うより先に手が出るほど習慣として染みついていた自慰行為。実行できないのは確かに不満だが、流石に一日程度の我慢は何の問題もない。

媚薬も思ったより効きが弱く、本当に効果が強いものを使われているのか不安になるほどだ。

勝つのは当然として、ハンデの効果が見た目にも表れなければイカサマ疑惑をかけられても仕方がない。出来れば分かりやすく発情する程度には効果が表れるように……そう願って、禁欲一日目が終わる……

……禁欲生活、二日目。

(毎日のように淫闘ばかりだったからかしら、ハメてないと違和感を覚えるわね。でも、オナニーもセックスも

してない上に媚薬まで飲んでる割りに、言うほど興奮しないものね……ハンデになるのかしら?)

普段なら、二日も経てば知り合いやファンなどから淫聞まがいの話をもちかけられる。そして当然、それらも全て受けてはこっ酷く搾り取るのだが……今はそれすら出来ない。そういう意味では嗜虐心に渴きが表れるものの、やはり肉体はまだ通常以上の変化がない。

貞操帯の上から秘部をコツコツと叩き、疼きが生まれるように祈り、また一日が過ぎていく……

……三日目。

「ふ……♥ ふう……♥」

(少し欲求不満が溜まってきてる……♥ まだハンデにはならないけど……この調子なら、少しは試合も愉しめるかも……)

ようやく発情効果の芽が出て来たようだ。身体の芯がほんのりと熱くなり、むず痒さに太股を擦り合わせて小さく煩悶する。

試合当日には、この疼きが倍化していることだろう。ならば試合もハンデがないよりはかなりマシになるはず。不安が期待に反転し、愉しみにしながらベッドに寝転がる……

……四日目。

「……………♥」

……五日目。

「ふっ♥ う♥ あ……………っ♥」

(なんでっ……今頃になって、こんなに効いてくるのよっ♥ マズいわ、完全にクスリが回ってる♥ オマンコっ♥ 疼くうっ♥)

試合まであと二日という頃になり、媚薬の効果が爆発的に強化された。どうやら遅効性だったらしく、効くのが遅い分、使用し続ければ相当の発情状態に陥るタイプのようなのだ。

貞操帯などなければ、迷うことなく自慰か性交を決める疼き。想像以上の効力に、試合のことなど考える余裕もなく、肉感溢れる身体をくねらせて性欲をどうにか凌ごうとする。それでも疼きは全く治まらず、悶々とした夜を過ごすのだった……

……六日目。

(オナニーしたいオナニーしたいオナニーしたいセックスっチンポっ中出しっ誰でもいいからハメて欲しいっ早くっ早く明日になってっあっヤバっイキそっオナニーしなくてもっ……………イッ、イケないっやっぱりオナニーとセックスないとダメえっ早く犯させてっ犯してええええっ♥♥)



そしていよいよ、七日目——試合当日。

「ふ————♥♥ ふ————♥♥」

『さあ、来場の皆様！ 長い一週間が過ぎました！ いよいよ女王初の媚薬漬け&性欲管理生活ハンデマッチで

す!』

一転して予想外の効果を発揮したハンデを経て、マルティナは一週間ぶりにリングの上に舞い戻る。待ち侘びた観客たちが女王の姿を見て興奮し、一気に闘技場全体が沸き上がる。マルティナのファンか否かを問わず、その眼は女王が初の敗北を喫することを愉しみにしていた。一方マルティナは、淫闘を前にしてデビュー一時以来の怖気を感じていた。

(マズいっ♥♥ ハンデ強過ぎたわ♥♥ こ、ここまで効くなんて……♥♥
こんなの、勝ち目なんてないわよおっ♥♥)

……明らかに、やりすぎた。気が狂うほどの発情状態に、マルティナは強い媚薬を選んだことを後悔していた。昨日の時点で発情のあまり発狂寸前となっていた肉体だが、今は更に昂ぶっている。淫闘どころか、他者との軽い接触……いや、日常の動作すら細心の注意を払わねばならないほど、極度に敏感になっているのだ。これではよほどのことがない限り敗北は明白。ある意味、愉しめるかもしれないが、ここまで極端では意味がない。

しかも禁欲生活は肉体以上に精神を追い詰めており、頭の中は早く淫闘すること、男に蹂躪される無様な未来しか考えられない。

観客のギラついた視線を浴びたこともあり、いよいよ性欲の昂ぶりがピークに達している。何もせずとも秘部が濡れ、興奮で顔が朱くなったまま実況が開始される。

『さて、初となる媚薬と禁欲のハンデを課しての淫闘！ ……女王、体調は万全か？ 顔色がよろしくない……いえ、ある意味とても健康的な感じだが……？』

「ええ……♥♥ 問題ないわ♥♥ さっさと始めましょう♥♥」

『強気の発言です！ しかし見た目は明らかに欲情している！ これは今日こそ女王の陥落する時か？！ ……そして本日の対戦相手はこちら！ 一週間前、女王の手によって搾精された選手です！』

強がってみせるが、やはり観客にも実況にもマルティナの発情ぶりが目に見えている。このままでは、あっさりと敗北して闘技場全体の晒し者と化してしまう。子宮の底から震えるマルティナだが、対戦相手を紹介されて一気に安堵する。相手はマルティナを押し倒して犯し、優勢かと思われる状況から一気に敗北した少年だ。同じ選手を使うことで、ハンデを課す前と後での違いを分かりやすく観客に教えるためでもある……と、実況から解説が足されていく中、自分を奮い立たせる言葉を頭の中で繰り返す。

(あ……あの子♥♥ よかった♥♥ あのチンポなら楽勝だわ♥♥
とっとと終わらせて♥♥ あのチンポでストレス発散させてもらおうわっ♥♥)

異常発情した今、未知の対戦相手が来たなら本当に敗北していただろう。だが相手は一度戦い、実質完封した少年。責め方も性格性癖もよくわかっている。彼相手であれば勝機もある。落ち着いて闘えれば……と精神を集中させる中、試合開始直前となり、スタッフによって貞操帯が外される。

【よろしくお願ひします。……こんな形で少し残念だけど、今日はこっちの勝ちだね。ていうか棄権した方がいいと思うけど、大丈夫？】

「誰にもものを言ってるのよ♥♥ また前みたいに搾り抜いてあげるわ♥♥

二度と勃てないようにしてやるんだから♥♥ 手負いの私に挑んだこと、後悔しなさい♥♥」

『早速ゴング前から睨み合う両者！ 火花が散る中、女王の貞操帯が解除され……！ 試合……』
——開始っ！

(速攻♥♥ じゃないと勝てない♥♥)

開始と同時、回り込むために全力で駆ける。手の内も力量も分かっているが、流石に受けに回っては今の身体では保たない。

一流闘士の速度で圧倒しようと考えていたマルティナ。すぐさま少年の背後に回る……はずだったが、身体が思うように動かない。

骨身に沁みる発情は、運動能力も劇的に奪っていた。速度感覚だけは衰えていないだけに今になってようやく気付き、更に動きがワンテンポ遅れてしまう。

マルティナの持ち味である機動力。それすら少年以下となっており……どこか時間の流れが緩やかに感じられる中、相対する少年が、掌で迎撃してくるのが見える。このままでは、胸が強く揉まれてしまう。確実に絶頂する威力だろう。動体視力と思考速度でそれが把握できていながら、緩慢な肉体では回避できず——

(なに……これ♥♥ 身体が、重い……あ……ダメ♥♥ おっばい♥♥ 触られ——)

ぎゅむうっ♥♥

「ほおおおおおおおっ♥♥♥♥」

『ぜ、絶頂——！ 早い！ 早すぎる！ 女王、開始とほぼ同時に一度目の絶頂だ——！』

胸を一揉みされただけで即絶頂。爆発的に広がる快感の波に一瞬たりとて耐えられず、開幕一撃で以って大声を上げて牝と化してしまっていた。

マルティナはおろか、底辺の選手でも有り得ない超早期絶頂に会場は一瞬戸惑った後、女王のアクメを確認して歓声を上げる。

「お♥♥♥ お♥♥♥ ほおおお♥♥♥」

【だから言ったのに……ほとんど即墮ちしてるよ？ 今からでも遅くないから降参したら？】

前回とは打って変わって立場が逆転した二人。少年がクスクス嘲笑って爆乳を揉みながら、再び敗北を認めるよう忠告してくる。だが女王として、ここで引き下がるわけにはいかない。

「な♥♥♥ 舐めないで♥♥♥ この程度のハンデ♥♥♥ 私には丁度良いくらいよ♥♥♥

キミみたいな粗チンに負けるなんて、有り得な」

【あっそ、じゃ遠慮なく♪】

「待っ♥♥♥ おあああっ♥♥♥」

強がる言葉が中断させられる。少年が今度は股間を責めてきたのだ。右の手で牝孔を突き、左手で陰核をなぞり上げる。バニースーツの上からの的確な責め……といっても最上位の選手としては標準レベルのものだが、自慰すら封印されていたマルティナには過激すぎるものであり、早くも二度目の絶頂に至る。

『女王またイッた！ やはりハンデが相当に効いている——！ 皆様ご覧になられているでしょうか！ あのマルティナが、こうも簡単にイカされるとは！ そして——』

「あっっ♥♥♥」

『挑戦者マウントをとる！ 早くも挿れるのか——?!』

絶頂で体勢が崩れたところを押し倒される。仰向けになった女に男が覆い被さる、典型的な正常位。それは前回と同じ体位であり、少年はリベンジを意識して狙ってこの体位に持ち込んだのだろう。

【さて……今のマルティナさんにコレをブチ込んだらどうなるのかな〜♪】

「っっ♥♥♥ な……なによ♥♥♥ 脅しのつもりなの♥♥♥

そ♥♥♥ そんな♥♥♥ 締め付けたら一瞬でイっちゃうだけの粗チン♥♥♥ どうってことないわ♥♥♥」

(ちんぽっ♥♥♥ ちんぽがこんなに強く見えるなんて♥♥♥ ダメよ♥♥♥ これだけは……♥♥♥)

体験版はここまでです。続きは製品版で！